

～ 授業改善への取組 ～

今回は、各教科が現在何を意識して単元や1時間の授業をつくっているのかを紹介し、9月に教科主任が自分の教科会メンバーの授業を参観し取り上げた課題や改善事項(Ⓐ)と、その改善策(Ⓑ)を載せています。また、Ⓑには、10月に教科内で授業を見合い、事後協議で改善策として考えたポイントも載せています。

- 国語： ・「めあて」を子供と共に考えて立てる（引き出す）。
・グループ活動の効果的な活用。
・思考の流れが分かる板書。

- 社会： ・やるべきことがあいまいだと教師主導やズレにつながる。
・「ゴール」（「今日の授業の方向性」、「できる/わかること」）につながる見通しがもてる「めあて」にする。（それが主体性にもつながる）

- 数学： ・生徒主体の授業になるための深い教材理解。
・生徒の思考の助けになる発問の工夫。

- 理科： ・本時のやりたいことと問題が合っていない（「めあて」は合っている）。
・やることが焦点化されていない。

- 体育： ・クラスの雰囲気により、活発なところとそうでないところの差が大きい。
・意見を言葉にして伝えることに課題が見られる。

- 英語： ・「目的・場面・状況」が生徒の中に明確にあり続けていないため、見方・考え方が働ききいていない。
・「問題」「めあて」「まとめ」や授業の流れは統一しているが、みんなそれぞれになっている。
・教師主導になっている面もある。

A 各教科の課題や今後の改善事項
(9/17～9/30 教科主任による授業参観より)



B 各教科の課題に対する改善ポイント
(上記Ⓐに関する改善ポイント & 10/1～10/18
各教科で見合う授業の事後協議より)

- 国語： ・「めあて」を子供と共に考える。引き出す。
・「まとめ」につながる「めあて」か、ねらいと学びにズレがないかを意識する。
・ゴールから考える（汎用性の高さ、他でも使える）。
・何を学ばせたいかを明確にする。 / ・板書を持ち寄って検討する。

- 社会： ・教師自身が付けたい力、ゴール、働かせる見方・考え方を明確に持つ。
・何を学習するのか生徒自身が見通しを持てるように、授業の中で「めあて」を確認したり、「めあて」に戻ったりする。 / ・ゴール（付けたい力）を意識させる。
・問題解決に向かう資料の取捨選択や既習を生かす。
・「めあて」の示し方、資料の確認を丁寧に行う。 / ・問いに向かわせる声掛けや発問の工夫をする。

- 数学： ・生徒から問題を引き出す。
・「めあて」について、再確認したことを共有する。
※今までの「めあて」は問題の焦点化を図っていた（こういう時もあるが、これからの「めあて」は付けたい力を生徒に分かるように具現化したものにする。（方法の説明、理由の説明、事柄の説明が「まとめ」となるように「めあて」を設定することも良い。）
・生徒の思考に寄り添って授業を考える中で意味理解を図る。

- 理科： ・「どうすれば解決できるか」という「めあて」を設定し、そこに着目できるようにする。
・「めあて」で課題を明確にする。（仮説の時は着目するポイントを考えられるようにする。）
・「まとめ」などを全員が書けるように、授業の中で全体で共有する場面を設定する。その際には視覚的にイメージできるものを使う。

- 音楽： ・子供たち自身で評価させる場面をつくり具体的な振り返りをする。また、それを生かして次時につなげていく。
・音楽の見方を常に提示し、学びが積み重なるように計画する。

- 美術： ・（書体の法則性など）今後の取組の中でいくつかの課題を経て、理解の定着度合いを把握していく。

- 体育： ・タブレットの活用等で自己を振り返らせる。
・生徒の手本を実技で見るようにする。（アドバイスの手本も示すことを検討する。）
・個々の目標を具体的に設定する。 / ・運動量の確保。 / ・基礎の学習を高める。
・多角的な指導の工夫（ICT、視覚、実技、習熟度別など）。

- 家庭科： ・前時の振り返りをもとに、本時では何を意識させたいかを教師が明確に持つ。
・何を視点に見たり考えたりするのかを明確にし、理解が追い付いていない生徒がいる際には視点を再確認する。

- 英語： ・授業の途中で、「問題」や「めあて」に立ち返り、課題解決のために意識すべき点を再確認する。
・単元計画（進度表）で「まとめ」を先に検討して授業の中身を考えていく。
・単元の途中に板書の写真を交流する。
・「問題」と「めあて」の捉え方を再検討する。
・「問題」「めあて」は生徒とのやり取りを通して設定するが、教師が意図することを焦点化していく。



